

J・M・アルゲダス『ヤワル・フィエスタ』における
動物表象：雄牛とコンドル、支配層と先住民

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2022-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花方, 寿行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028652

J・M・アルゲダス『ヤワル・フィエスタ』 における動物表象

—雄牛とコンドル、支配層と先住民—

花 方 寿 行

ペルー人作家ホセ・マリーア・アルゲダス（1911-1969）の長編小説『ヤワル・フィエスタ Yawar Fiesta: Fiesta de sangre』は、1941年に刊行されインディヘニスム¹作家としてのアルゲダスの評価を確立した初期の代表作である。先住民人口の多いアンデス山地の町で開催される闘牛をめぐる、現地の先住民、クリオーリョ（スペイン系住民）やメスティーソ（混血）の支配者層、海岸部から派遣されてきた郡知事、そして首都リマで先住民の生活・社会的地位改善のために活動する都市化した先住民活動家の思惑が交錯するドラマは、同時代ペルー社会において先住民が抱える問題をリアリスティックかつ重層的に描き出しており、文学的創作と民俗学的研究の両面においてケチュア系先住民の文化や心性を記録し表現し続けてきたアルゲダスの真骨頂を示している。

にもかかわらずこの作品には、一点奇妙なことがある。タイトルになっているヤワル・フィエスタとは、旧宗主国スペインから持ち込まれ、アンデス地方独特の変化を遂げた闘牛を意味する言葉だが、一般的に文化人類学や民俗学研究において「ヤワル・フィエスタ」として記録されているものと、この小説に登場するものでは、その構成要素に大きな違いが存在するのである。本論文では両者の相違点、特に小説『ヤワル・フィエスタ』におけるコンドルの不在および雄牛が象徴するもののずれに注目することによって、アルゲダスの改変の意図と先住民問題の捉え方を明らかにしてゆく。

¹ インディヘニスムとは、広義にはスペイン出身者やクリオーリョなど非先住民が主体となった先住民保護活動を指すが、より一般的には20世紀初頭から1980年代にかけて広まった、先住民の被る差別や貧困といった問題を国民国家における社会問題として捉えその解消を図る考え方を指す。こうした考えの下先住民の生活や抱える問題を描いた文学作品をインディヘニスム文学といい、アルゲダスやシロ・アレグリーアなどの作品がその代表的なものである。

1 ヤワル・フィエスタ——その実態

アルゲダスの小説『ヤワル・フィエスタ』における表象を論じるためには、まずその前提として、ペルーのアンデス地域で一般にヤワル・フィエスタと呼ばれている闘牛の実態と、そこにおいて表現されているシンボリズムを知っておく必要がある。

牛はアメリカ大陸には元々生息していなかった動物であり、16世紀にスペイン人による新大陸征服が進む中で、ヨーロッパから持ち込まれたものである。現ペルー・ボリビアにまたがるアンデス地域を中心に広がっていたインカ帝国の征服がピサロ兄弟を中心に進められたのは1520年代後半から30年代にかけてだが、牛の導入はその後速やかに行われたものと考えられている。友枝啓泰によれば、アンデス山岳地帯に牛が導入されたのは1540年代初めとみられ、1540年代にはワマンガという町で市民の一人が市会に牛を飼育するための土地を与えるよう要請した記録がある²。代表的なクロニスタ（アメリカ大陸征服期の記録を残した者）の一人シエサ・デ・レオンは1540年代後半アンデスを広く旅し、レオン・デ・グアヌコ（ワヌコ）など幾つかの町で牛が飼育されていたことを記録している³。同じく著名なクロニスタであるインカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベータはクスコで彼自身が初めて役牛を見たのは1550年頃だったとしているが、役牛の導入自体はもう少し早かったのかもしれない⁴。インカ帝国の首都であったクスコが陥落した後スペイン人支配への抵抗を続けたティト・クシ・ユパンキが97頭の牛を飼っていたという記録があり、先住民の間でも早くから牛の飼育が広まっていたことが窺われる⁵。

闘牛もまた、早くも征服期初期にスペインから導入されている。19世紀ペルーの作家で植民地時代ペルーの歴史や風俗について多くの記録を残したりカルド・パルマによれば、リマで最初に闘牛が行われたのは1540年3月29日、パルベルデ僧正による聖油聖別を祝って催されたものだった。この時は闘牛好きのフランシスコ・ピサロ自ら馬上から槍を振るって牛を殺したという⁶。18世紀半ばに

² 友枝啓泰『雄牛とコンドル——アンデス社会の儀礼と民話』岩波書店、1986、183頁。

³ シエサ・デ・レオン『インカ帝国地誌』増田義郎訳、岩波文庫、2007、434頁。

⁴ インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ『インカ皇統記』牛島信明訳、岩波文庫、2006、4巻262-263頁。

⁵ 友枝 前掲書 184頁。

⁶ Palma, Ricardo, *Tradiciones peruanas completas*. Edición y prólogo de Edith Palma, Madrid: Aguilar Ediciones, 1953 (2ª edición), pp. 46-47.

なるまで、リマでは手槍を用いる騎馬闘牛士（レホネアドール）しかいなかった。ピサロの闘牛の際には先住民は闘牛に加わらなかったようだが、植民地時代に祭りで行われるイベントとして闘牛が定着すると共に、先住民の参加も増えていった。18世紀末には、短い槍（moharras）を使って牛を突き殺す役のモハレーロ（mojarreros）と呼ばれる先住民や、板にもたせかけた太い槍で囲いから飛び出す雄牛を勢いで串刺しにする「槍刺し lanzada」で槍の後ろに控える先住民（時には槍を躲した雄牛に殺されることもあった）など、先住民が闘牛に参加するのが常態になっていた⁷。リマでの闘牛に参加する先住民はリマに近いワロチリ地方出身で、多くの犠牲者が出たというが、先住民が意に反してスペイン人征服者・スペイン系支配層に危険な行為を強制されていたと解釈するのは早計である。18世紀にはアンデス中で闘牛が普及していたらしく、先住民も熱狂していたという記録があり、現在の先住民共同体でも闘牛は祭りの一部を成しているからだ⁸。

なお、後に小説『ヤワル・フィエスタ』において補完的だが重要な役割を果たすことになるため、スペインにおける闘牛の歴史的变化についても簡単に確認しておこう。ギャリー・マーヴィンによれば、貴族が祝い事などに合わせて行った闘牛の最も古い記録は1080年に遡り、16世紀に精緻さ、華麗さにおいて頂点に達した。当時は貴族が馬に乗り、徒歩の助手を従え、フェンスで囲まれたアリーナで牛を刺し殺すというものだった。「演じるのはプロではなく、馬術に優れ、軍人としても優れた、社会の指導者層」であり、それが「自分の力を、そして社会的地位を人々に誇示しようとして」行っていた⁹。したがって16世紀にピサロが自ら騎馬闘牛を行ったのは、同時代本国スペインでの開催と同じ目的、同じ形式であったと言える。

この当時闘牛の主役は騎馬の貴族であり、平民が勤めた徒歩の助手はあくまでサポート役だった。植民地時代リマにおいて徒歩の先住民が闘牛に加わるようになっていったことも、したがってスペインでの開催方式と大きく異なっていたわけではない。また貴族の闘牛とは異なり記録が少なく不明な部分が多いが、デ＝コシオは騒々しく無秩序な牛の刺殺の催しを闘牛の初期形態とし、中世の文書で「牛を走らす」とある時はこの行事を指すとしている。またガルシア＝バケーロらは村人の参加する「走らせ（コリーダ）」では、牛が投げ槍やナ

⁷ *Ibid.*, p. 49.

⁸ 友枝 前掲書 184-185頁。

⁹ マーヴィン、ギャリー『闘牛——スペイン文化の華』村上孝之訳、平凡社、1990、98頁。

イフなどで傷つけられた末八つ裂きにされるとしている¹⁰。「雄牛の走らせ *corrida de los toros*」は現在スペインで一般に闘牛を指して用いられる表現であり、明らかにここには連続性が見出される。こうした行事は現在も行われている牛を通りに放し追いかけるカペアや、闘牛に用いる雄牛を囲い場に追い込むエンシエロに似ているが、後でも述べるように、ペルー先住民の闘牛にはこうした民衆闘牛との共通性がより見て取れる。

騎馬闘牛は16世紀末まではランサーダと呼ばれる、長い槍を用いて牛の小脳を刺す一撃で仕留めようとするものが主流だったが、17世紀には馬を身軽に牛の周囲で動かしながら短い手槍（レホン）を複数突き刺して仕留める形式が主流となった¹¹。この形式は現在でもレホネーロとしてスペインで催されており、遂行者であるレホネアドールには今も貴族や富裕な地主階級出身者が多い。また現在の闘牛において馬上から雄牛を槍で突くピカドールが、金をあしらった衣装を身につけているのは、貴族による騎馬闘牛の名残である¹²。しかし17世紀になると徒歩の、平民の闘牛士による行事に人気が集まるようになり、18世紀にはその影響や馬種の変化により、貴族による騎馬闘牛は廃れていった¹³。騎馬の長槍方（バリラルゲーロ）と徒歩の闘牛士（マタドール）の立場は、フランシスコ・ロメロがムレータとカポータを発明・工夫し、現代の闘牛術を確立、ライバルのペペ・イリョと共に闘牛ブームを巻き起こした1780年代前後に逆転する¹⁴。こうして成立するのが現代まで続く、徒歩の闘牛士（マタドール）、バンデリジェーロ、騎馬のピカドールが組を成して行われるスペイン式闘牛である。

なお18世紀スペインの闘牛ブームは同時代の画家ゴヤによって画布に留められているが、同じ世紀にアンデスで先住民が闘牛に熱狂していたのは、直接このブームの影響を受けてではなかったであろう。引き続き紹介するようにアンデス式闘牛は18世紀にスペインでブームを巻き起こしたスペイン式闘牛には似ず、中世スペインの民衆闘牛により近いものだからだ。

さて、友枝は20世紀後半になっても先住民の間で行われていた闘牛について、先行研究と自身の1980年代初頭におけるフィールドワークに基づき、一般的な

¹⁰ 同上書 96-97頁。

¹¹ バラテ、エリック&アルドゥアン＝フュージェ、エリザベト『闘牛への招待』管啓次郎訳、白水社、1998、17-18頁。

¹² 有本紀明『闘牛——スペイン 生の芸術』講談社、1996、25頁。

¹³ マーヴィン 前掲書 102-104頁。

¹⁴ 有本 前掲書 93、100-102頁、佐伯泰英『闘牛なぜ殺されるか』新潮社、1998、32-33頁。

闘牛とコンドルラチの2種に分けて記述している。まず一般に闘牛は、放牧されている雄牛を闘牛場に当てられる広場の石積み囲いに追い込む作業から始まる。当日はそこから牛を1頭投げ縄で捕らえ、数人がかりで動けないよう押さえつけて、首・背中・尾にエンハルマと呼ばれるハンカチ大の色布を結びつけ、角には小さい鏡や金属製の食器などを吊り下げてから、広場に放す。すると若者が次々と広場に入り、ポンチョを振るって牛をあしらう。ただしスペイン式の闘牛とは異なり、多くの場合牛を傷つけたり殺すことはなく、疲れすぎないよう10~20分で牛を交代させながら、全部で15頭ほどの牛を夕方までかけてあしらい続ける。牛を提供する共同体と闘牛士を提供する共同体が入れ替わる形で2日間開催され、評価は個々の闘牛士ではなくどちらの共同体がよかったかについて下される¹⁵。見物人は闘牛士の技よりも牛のたくましさや荒々しさに関心を寄せている¹⁶。こうした先住民による闘牛では、後で述べるコンドルラチの場合を除き雄牛は殺されないのが通例だが、リマから専門の闘牛士を招いて催される闘牛においては、スペイン式に雄牛が殺される。この場合殺される牛(Toro muerte)を提供するのは主催者の関係者になる¹⁷。

アンデス地方では、このような人間と雄牛のみが行う通常の「闘牛」に加えて、コンドルを雄牛の背に括り付けて行われるコンドルラチと呼ばれるものがある。友枝によれば、これが現在ヤウル・フィエスタ、「血の祭り」と呼ばれるものである。コンドルラチがいつ頃始まったのかは不明だが、19世紀末には記録がある。通常の闘牛とは異なり分布地域は限られており、行われる場合も毎回ではない¹⁸。コンドルラチは独立した行事ではなく、通常の闘牛の中で何回も行われるものであり、生きたまま捕獲したコンドルを雄牛の背中に革紐で縫い付けて広場に放すところが特徴だが、以後の手順は通常の闘牛と変わらない¹⁹。つまりコンドルラチにおいては、生きたコンドルが通常雄牛に括り付けられるエンハルマや鏡・食器に替わっていることになる。ラチがケチュア語で「引っ掻く」「傷つける」を意味することから、友枝はコンドルが逃れようと雄牛を傷つけ攻撃することからコンドルラチという名称がついたとしている²⁰。ただし彼自身こうした形式のコンドルラチはアンデス南部、1980年代にはアブリマク

¹⁵ 友枝 前掲書 186-188頁。

¹⁶ 同上書 191頁。

¹⁷ 同上書 211-212頁。

¹⁸ 同上書 193頁。

¹⁹ 同上書 198頁。

²⁰ 同上書 193-194頁。

県周辺に限定されており、アンデス北部のコンドルラチは宙吊りにしたコンドルを罾り殺しにする催しであるとしている²¹。したがってコンドルラチにおけるコンドルは、「傷つける」行為の主体でも客体でもあり得ることになる。なお闘牛の一部を成すコンドルラチでは、雄牛もコンドルも原則死ぬことはなく、役目の終わったコンドルは祭りの翌日山に返される²²。先に記したように現在雄牛が殺されることは全体に少なくなっているが、コンドルラチの後で人間が雄牛を殺し、肉を食べることはある²³。

コンドルラチにおいてコンドルが何を象徴しているかについては、様々な解釈が存在している。(雄)牛がスペイン人によって持ち込まれたことからスペイン人征服者を、アンデス固有の鳥であるコンドルが先住民を象徴するという解釈がマクガーハンやバリオヌエボによって示されており、友枝はこうした解釈にはインディヘニスモの影響が感じられるため比較的新しいものではないかとしながらも、コンドルを罾り殺しにするアンデス北部におけるコンドルラチを先住民異教徒根絶の表象であるとするカトリック神父の説明との間に一貫性があることから、一理あるとしている²⁴。コンドルと先住民の重ね合わせは、アンデス住民にとって静かに、きれいに肉を食べるコンドルが牛の解体の手際の良さや良いマナーの手本とされたり²⁵、コンドルラチの後で人間が「コンドルに代って」雄牛を殺すこと²⁶にも見て取れる。

ただしコンドルがいかなる場合でも先住民を象徴するものと機械的に判断するのは危険である。例えばアンデス北部のコンドルラチは、友枝が指摘するように、鶏を用いてペルーで広く行われているガヨ・ティピやハラ・パトの規模を大きくしたものである²⁷。鶏を用いる形式であればヨーロッパにも存在している豊穰儀礼であり、それがコンドルに代わったからといって特別にペルーの先住民と結びつけて解釈する必要はない²⁸。南部でのコンドルラチにおけるコンドルの役割についても、スペイン人を象徴する雄牛と対峙するものとして先住民と重ね合わせる以外の解釈も可能である。このコンドルラチでは、通常の

²¹ 同上書 199頁。

²² 同上書 194-195頁

²³ 同上書 200-201頁。

²⁴ 同上書 201頁。

²⁵ 同上書 203-205頁。

²⁶ 同上書 200-201頁。

²⁷ 同上書 199頁。

²⁸ ルイス・ブニュエルが監督した映画『糧なき土地』(1933)では、スペイン北部の村で行われる祭りでの、宙吊りにされた鶏を走る馬上からむしり取る催しが記録されている。

闘牛と同様に、先住民は雄牛をいなしに広場に入る。コンドルが先住民を象徴すると考えるならば、この場では現実の先住民とそれを象徴するものとしてのコンドルが同時並行して雄牛と対峙することになってしまう。これに対して事前に雄牛の背中に括り付けられているという点で、コンドルは通常の闘牛におけるエンハルマや鏡、食器と同じ機能を担っているとも考えられる。エンハルマは繁殖儀礼において所有者が家畜の耳につける花やリボンなどの飾りに通じ²⁹、鏡は増殖、食器は食事をシンボライズする。先に述べたようにコンドルは先住民文化において食肉加工や食事と結びつけられており、これらと等価のものとして繁殖儀礼の一部に組み込まれてもおかしくはない。さらにコンドルは、「闘牛士」の登場前に雄牛の背中に付けられ血を流させる機能を持つという意味では、スペイン式の闘牛においてバンデリジェーロが打ち込むバンデリージャ（手鉞）に相当する。ただしスペイン式闘牛におけるバンデリージャは雄牛に出血させ、闘牛士（マタドール）がムレータであしらいやすくする役目を持つが、コンドルラチのコンドルは雄牛を弱らせるほど出血させるわけではない。いずれにせよこのように解釈する場合、コンドルは繁殖儀礼において先住民が用いる道具としての機能を持つが、先住民そのものを象徴する存在であるとは言い難くなる。

友枝は先に記したようにコンドルが先住民を象徴するという解釈に一理あるとしながらも、自身は先住民がコンドルを山の神格アプの「配下にあると考え、それに従う監視者、使者あるいはニワトリ（すなわち家禽）だといい、またときには神格の直接の体現者ともなる」としている³⁰。この場合コンドルは確かに先住民文化に属する重要な存在を象徴・体現しているが、先住民そのものを象徴しているわけではない。

それでは雄牛の方は闘牛において何を象徴しているのだろうか？ 確かにコンドルラチか通常の闘牛かを問わず、雄牛は一貫して先住民が対峙する相手であり、対立相手としてスペイン人征服者を象徴していると考えすることは不可能ではない。だがこれも先住民文化において必ずしも一般化可能な解釈ではない。先に述べたように先住民の行う闘牛においてはある共同体が他の共同体の成員が闘う雄牛を提供することになる。雄牛を用意する側がオブリガード・デ・トロ（雄牛の義務を負うもの）、闘牛士を用意する側がカピタン・デ・プラサ（広

²⁹ 友枝 前掲書 163頁。

³⁰ 同上書 201-202頁。

場の主将) と呼ばれるが³¹、オブリガードが雄牛の所有者に提供を求めに行く時歌う歌では、「歌の意味からすれば、歌う主人公《わたし》はオブリガードであり、おまえ、兄弟、仲間と呼びかける相手は雄牛をさしている。また歌っている状況からすれば、牛の所有者をさしており、牛あるいはその所有者に対して援助、協力の要請をして（中略）自分たちの一体化を求めている。」³²提供する側にとって雄牛の荒々しさは自慢の種であり、他の共同体の成員である闘牛士が雄牛の背中にまたがるのは相手に対する最大の侮辱として、時に大喧嘩につながることもあるという³³。闘牛の合間には主催者自身が雄牛の真似をして、闘牛士に見立てられたポンチョを構えた若者相手に突っ込むルナトロ（人間雄牛）があり、闘牛を含む祭りの間に行われる踊りの中にも人間が牛に扮する場面がある³⁴。つまり友枝によれば多くの場合、アンデス住民にとって（雄）牛はスペイン人征服者やスペイン系支配層ではなく、それを提供する人間、さらには「山の神格、そこに放牧される牛、その土地に住む人々という一つの村全体を代表する」³⁵存在なのである。

中でも特別に評判となる荒牛は神話的な存在ともなり、エンカあるいはイリャと呼ばれ、中央アンデス各地に伝説が残されている。ワンカヨ地方の伝説ではイリャと湖が結びつけられ、湖から現れそこに姿を消す存在となっている。エンカやイリャは山の神格アプ、アウキ、ヒルカ、オルホ、ワマニと密接に結びついており、イリャはアプが地下で飼っている家畜だとされる。イリャは土製や石製の像でも表され、家畜の繁殖儀礼で呪物として用いられる。ケチュア語圏では牛のことをワカ（waka）と呼ぶが、これはスペイン語で雌牛を指す単語バカ（vaca）から来ていると共に、元々ケチュア語で神聖な事物、事象、神格を指す言葉でもある³⁶。この場合、牛は先住民そのものを表すものではないが、アンデスの伝統的な山岳信仰と結びついた身近な存在であり、決して外来のもの、他者としてのスペイン人・スペイン系住民と結びつけられてはいない。現在でもプカラ地方では陶器の牛が家の繁栄のお守りとして屋根飾りに用いられ、観光用の土産物にもなっている（図1）。

³¹ 同上書 188-189頁。

³² 同上書 191頁。

³³ 同上書 188頁。

³⁴ 同上書 207頁。

³⁵ 同上書 212頁。

³⁶ 同上書 191-193頁。



(図1)

なおスペインの闘牛において雄牛が象徴するものについては諸説あるが、クレタ、シュメール、エジプト、アナトリア、シリアに共通する、生命力を象徴するものとしての牛を儀式的後生贄にしたという古代の行事を前提に、豊穡儀礼に起源を持つという考え方が³⁷。ただし古代地中海・近東文明とスペインの闘牛の直接的なつながりは確認されておらず、その連続性に否定的な考えを示す者もいる³⁸。一方エストレマドゥーラ地方では結婚式の2日前に新郎とその友人たちが最も荒々しい雄牛を追って村中を走り回り、新婦の家まで連れて行くと、新婦が手製の2本の花飾りのついたバンデリージャを牛の背に打ち込み血を流させるという儀式が20世紀初めまで残っていたという³⁹。この明らかな多産祈願の儀礼とスペイン式闘牛におけるバンデリージャ打ち込みの類似を考えると、起源や元型とされる儀式との連続性は不確実だとしても、スペイン式闘牛が、中世以来の民衆闘牛同様、雄牛を生贄にする豊穡儀礼の意味合いを持っていたと考えることは不自然ではあるまい。

³⁷ 有本 前掲書 47-48頁。

³⁸ バラテ&アルドゥアン=フェュジェ 前掲書 14-15頁。

³⁹ 佐伯 前掲書 73頁。

これに対してアンデス式闘牛においては、原則雄牛は殺されないだけでなく、怪我人が出た闘牛は良いとされ、その年作物や家畜に恵まれる徴だと言われる⁴⁰。ここからはスペインにおける闘牛とは異なり、人間が雄牛を儀礼的に殺して神に捧げることで豊作・繁栄を祈願するのではなく、人間の流す血が神の化身としての牛に捧げられるという逆の形式の豊穰儀礼として闘牛が行われていると解釈することも可能である。

ただしエンハルマには、先に述べたエストレマドゥーラ地方の儀礼における花飾りのついたバンデリージャと似たところもあるため、ここでも雄牛と闘牛士の関係を単純に神とそれに血を捧げる者と固定しすぎないでおく必要がある。こうした殺すものと殺されるもの、傷つけるものと傷つけられるものの逆転可能性は、先に確認したようにコンドルラチにおけるコンドルにもみられたが、闘牛士が死傷する可能性を孕んだスペイン式闘牛にもみられるものである⁴¹。

さて、既に述べたようにコンドルと雄牛双方がアンデスの神話世界で重要な機能を果たしていることから、友枝は「生死、再生、繁殖にかかわる一つの神格アップの二面性として」コンドルラチにおける「《雄牛の背にまたがるコンドル》をみることはあながち無理とはいえないであろう」と結論づける⁴²。本論文はこの解釈の正しさを論じるものではないが、コンドルにせよ雄牛にせよアンデス世界において重要なシンボリズムを担っており、かつ多義的な象徴解釈が可能であるため、機械的なシンボリズム解釈は危険であり、あくまでも個別の儀礼や文脈に則って解釈するべきだということを確認できればいい。それではこのような実際の闘牛・コンドルラチと比較すると、アルゲダスの小説『ヤワル・フィエスタ』に描かれる闘牛は、どのような特異性を持っていると言えるだろうか？

2 小説『ヤワル・フィエスタ』における「ヤワル・フィエスタ」(1)

——現実との共通点に注目して——

アルゲダスの小説『ヤワル・フィエスタ』の舞台は、アンデス山中の先住民人口が多いがクリオーリョやメスティーソの有力者の屋敷や行政機関が集まっ

⁴⁰ 友枝 前掲書 189頁。

⁴¹ 有本はこの逆転が、(剣・角を)挿入するものとされるものの逆転というジェンダー的なシンボリズムにおいても成立することを指摘している。有本 前掲書 273-274、303頁。

⁴² 友枝 前掲書 205頁。

ている町プキオ (Puquio) と、その周辺部を成すピスカチュリ (Pichk'achuri)、カヤウ (K'ayau)、チャウピ (Chaupi) の3つの先住民共同体である⁴³。ただし元々先住民共同体として存在していたチャウピは、物語が始まる段階では鉱山の開発に伴い有力者が集住することで隣接してできた白人系支配層の町プキオに半ば吸収されている。プキオでは長年ペルーの独立記念日である7月28日の祝祭において現地式の闘牛が行われていたが、193*年、リマの中央政府から職業的な闘牛士が行うもの以外の闘牛を禁止するという通達が来る。これを受けて、海岸部から派遣されてきた郡知事やリマで権利拡大のために活動している先住民運動家など旧式闘牛禁止賛成派と、地元の大農場主や先住民など反対派の思惑が交錯し、ペルー社会における先住民とその伝統文化をめぐる複雑な力学が炙り出されていくというのが、物語の粗筋である。

この作品の原題は *Yawar fiesta: Fiesta de sangre* であり、ケチュア語で「血」を意味する *yawar* がケチュア語に暗い読者にわかりにくいことから、スペイン語のみに「訳した」副題をつけたものと考えられる。作中では「ヤワル・フィエスタ」という言葉は極めて限定された場合にのみ用いられており、通常用いられているのは“*turupukllay*”という男性名詞扱いされるケチュア語か、スペインでも用いられる *corrida* である。第3章冒頭で *turupukllay* が初めて用いられた箇所には作者自注が付けられており、「闘牛 (*Corrida de toros*)。同じく闘牛 (*las corridas*) のために角笛 (*wakawak'ras*) で吹かれる特別な音楽。」とされている⁴⁴。*Turupukllay* は「遊び」を表す *pukllay* に「雄牛」を表す *туру* (スペイン語の単語 *toro* (雄牛) が起源) が付けられた形なので、「雄牛の遊び」という意味になる⁴⁵。一方 *corrida de toro*、あるいは省略した形の *corrida*, *los toros* はスペインにおいて闘牛を指す一般的な表現だが、本論文第1節で見てきたように、アンデスの闘牛はプロの闘牛士が組になって行うスペイン式の闘牛とはかなり異なる。ただし *corrida* (走ること) という単語が、そもそも第1節で述べたように牛を走らせていたふる民衆闘牛に由来すること、有名なパンプローナのサン・

⁴³ 本論文では、小説『ヤワル・フィエスタ』に登場するケチュア語系の単語 (創作された地名も含む) のカタカナ表記については、ケチュア語の発音に詳しいネイティブと相談の上決定している杉山晃の翻訳における表記に従うこととする。

⁴⁴ Arguedas, José María. *Yawar Fiesta: Fiesta de sangre*. Lima: Editorial Horizonte, 1993, p. 27. 以下煩雑さを避けるため、本論文における同書からの引用／への言及は、本文中にページ数のみを記すこととする。また日本語訳は全て引用者による。

⁴⁵ Jimmy, “Aprendiendo nuevos conocimientos: Vocabulario en quechua de YAWAR FIESTA”, 2011.6.11., <https://docentejimmy.blogspot.com/2011/06/vocabulario-en-quechua-de-yawar-fiesta.html> (2021年9月16日取得)

フェルミン祭でのように闘牛前に牛を囲い場まで走らせるエンシエロでは、素人の住民が雄牛の前に飛び出して度胸試しをし、しばしば怪我人が出ることを考えれば、アンデス式の闘牛はカペアやエンシエロに近い民衆闘牛だと考えられる。なおwakawak'rasには既に第2章末で自注がついており、「雄牛の角で作られた角笛」(26)と説明されている。

さて、アルゲダスの言葉の選び方には、興味深い点がある。第1節で述べたように、「ヤワル・フィエスタ」は通常闘牛一般を指す言葉ではなく、闘牛の一部として行われるコンドルラチを指して用いられるものだ。ところが小説『ヤワル・フィエスタ』において中心的に扱われるのは人と雄牛が直接対峙する一般的な闘牛であって、コンドルラチではないのだ。

気をつけなければならないが、アルゲダスはコンドルラチの存在を知らなかったわけではない。郡知事に地元有力者が現地式の闘牛を説明する中では、以下のようなコンドルラチへの言及が為されている。

「それじゃあ20年前の闘牛 (las corridas) のことは何ておっしゃったでしょうね！ もっと荒れ狂うように、一番荒っぽい雄牛の背にコンドルを縛りつけていた時でさあ。コンドルにつつかれた雄牛は、何でもないかのようにインディオたちを振り飛ばしたもんでした。それからその後で近在の衆 (los vecinos) が馬に乗って入ってきて、槍で突いてすばっと雄牛を殺したんです。祭りの終わりにはコンドルの翼にリボンを縫い付けて、叫んだり歌ったりしながら放しました。コンドルはリボンを付けたまま舞い上がって、黒い尻みたいでした。」(41)

ここで言及されているコンドルラチには、第1節でまとめた友枝の記述と重なる部分と、微妙に異なる部分がある。コンドルを雄牛の背中に括りつけること、そのうえで通常の闘牛同様先住民が雄牛に挑むこと、雄牛自体は最終的に人間によって殺され、コンドルはリボンを付けて放されることなど、儀礼の大きな流れは完全に一致している。ただし友枝は雄牛が最終的に人間によって殺されることは、シンボリックにはコンドルによって殺されたことを表現しており、したがってここではコンドルと先住民が重ね合わせられていると解釈できるとしている⁴⁶。一方アルゲダス、あるいは少なくとも引用箇所ではコンドルラ

⁴⁶ 友枝 前掲書 200-201頁。

チを紹介しているプキオ在住の無名の人物は、コンドルを縛りつけるのは雄牛を暴れさせ、先住民をより弾き飛ばさせるためだとし、かつ馬に乗って槍を使い雄牛を殺す人物については、闘牛士を出している共同体の先住民ではなく、開催地プキオの近くの住民、即ちクリオーリョかメスティーツであることを窺わせる los vecinos という表現を用いることで、コンドルと先住民の重ね合わせを回避している。しかもコンドルラチはそもそも20年前から行われていないとされている。

それではこの小説に描かれる闘牛と現実の闘牛との相違はどのようなものかという点で、これはかなりの点で一致していると言える。作中においてはピスカチュリとカヤウの2つの先住民共同体が長年闘牛におけるライバル関係にあり、それぞれが提供する闘牛士と雄牛を闘わせ合っている。物語においては、元々コニャニ (K'oñani) という別の先住民共同体の領域にある平原に住む荒牛ミシトゥ (Misitu) が、大農場主ドン・フリアンによって、捕らえられるのであればという条件付きでピスカチュリに与えられる。ピスカチュリの村人がコニャニの村人にミシトゥの捕獲を許してもらいに赴く第10章では、ピスカチュリの村長 (バラヨック varayok') が両共同体それぞれを支配する山の神格ではなく、それらの上位に当たる地域全体を支配する山カルワラス (K'arwarasu) が闘牛を望んでいると訴える一方、コニャニの人々は去って行くミシトゥおよびミシトゥに去られる自分たちの悲しみを歌う (113-115)。このやりとりは物語上の状況の違いもあり多少異なっているが、オブリガードが雄牛の提供者の下を訪ね、協力を要請する際のやりとりを思わせる。近隣住人が恐れる伝説的な荒牛ミシトゥは、父も母もなくトルココチャ (Torkok'ocha) 湖から出現したと伝えられている (83)。これは中央アンデスに広く存在する、神話的な雄牛を湖と結びつける伝説と一致しており、友枝はこの種の伝説を紹介する際に、現実の地方に伝わるものの前に、この小説に出て来るミシトゥを最初の例に挙げている⁴⁷。

闘牛自体は、ピスカチュリの広場で行われる。この広場の出入り口をユーカリの柵で塞ぎ、有力者たちは広場に面したバルコニーや、壁沿いに先住民が作った観覧席から観戦する。スペイン式の闘牛とは異なり、壁沿いに避難用の板壁を作るのではなく、地面にとっさに退避するための塹壕を掘ってある。先住民は牛を怒らせながら闘牛場に入り、ポンチョを振るって牛をあしらうが、危険

⁴⁷ 友枝 前掲書 191-192頁。

になると塹壕に飛び込む。特に獯猛な牛の首から背中には、町の若い女性が作った絹地で四隅と刺繍に金貨または銀貨が縫い付けられた4つのエンハルマが付けられ、先住民はこれを掴み取るために雄牛に挑みかかる(39-40)。鏡や食器ではなく金貨銀貨が縫い付けられたエンハルマというのが異なっているが、金属製の光り物とエンハルマが雄牛の背中に付けられること、ポンチョによる牛あしらいが儀礼の中心を成していることは一般的な闘牛と一致している。なお友枝や『ヤワル・フィエスタ』の日本語版翻訳を行っている杉山晃は、アンデス式闘牛で闘牛場でポンチョを振るう先住民もリマから来るスペイン式闘牛のプロも「闘牛士」と呼んでいる／訳しているが、アルゲダスの原文では前者はcapeador(ケープを振るう者)、後者はtorero(闘牛士)とはっきり区別されている。

友枝のまとめた記述と小説『ヤワル・フィエスタ』で大きく異なるものとして、小説においては先住民が最終的にダイナマイトを投げつけて雄牛を殺すという要素がある。ダイナマイトはクライマックスで用いられるだけでなく、闘牛の紹介においても数カ所で言及されているので(40, 43, 98)、少なくともこの小説においては最も獯猛な牛を倒すのに用いられる手段として伝統的な闘牛の一部と見なされているが、友枝が紹介する事例では全く出てこない。そもそも一般的には雄牛が殺されること自体が稀であり、殺す場合にも短剣が用いられるか⁴⁸、スペイン式の闘牛で剣で刺されている⁴⁹。人と牛が混じり合う闘牛場でのダイナマイトの使用は極めて危険であり、友枝が解釈するように豊穰儀礼として闘牛を見た場合、食用にならない形に牛を吹き飛ばしてしまうというのは、儀礼としても必要条件を満たしていないと思われる。加えて通常農村においてはダイナマイトを入手し祭りで利用すること自体簡単ではないと思われるので、ダイナマイトの使用は決して一般的なものではなかったと考えるのが妥当だろう。これはかつて鉱山町として栄えたというプキオならではの手段と考えられるが、アルゲダスによる完全な創作なのか、豊穰儀礼としての意味をやや失って、鉱山町で実際に行われていたものなのかは定かでない⁵⁰。いずれ

⁴⁸ 友枝 前掲書 200頁。なおコンドルラチの後で人間が雄牛を殺すこの事例では、殺した後に切り抜いた目や切り取った耳を槍の先に突き刺している。

⁴⁹ 同上書 211頁。

⁵⁰ バラテとアルドゥアン=フュージェは、アメリカで行われていた闘牛を紹介する中でヤワル・フィエスタに言及し、「コンドルを牡牛の背に結びつけダイナマイトで爆破する」としている。バラテ&アルドゥアン=フュージェ 前掲書 61-62頁。ただしこの本自体はスペインとフランスの闘牛を中心に扱ったもので、ヤワル・フィエスタについての情報出典は定かではない。アルゲダスの小説『ヤワル・フィエスタ』が出典ではないかと思われるが、この作品ではコンドルラチと雄

にせよダイナマイトの使用は小説『ヤワル・フィエスタ』において特別に切り離されて言及されることはなく、伝統的な闘牛における危険や残酷さの一部として取り上げられている。

以上確認してきたように、ダイナマイトの使用や先住民の直面する危険の度合いは異なるとはいえ、小説『ヤワル・フィエスタ』に描かれる闘牛は、現実に行われるものと大体一致するものと言える。実際に闘牛に接した友枝は、個人的には村人の闘牛への熱中を共有できないとして、「荒牛」はそれほど遅くは見えず、雄牛は闘牛士にかかるより逃げ場を求めて走り回っており、順番に登場する牛を相手にした儀礼の反復は単調で盛り上がりや欠くとした上で、小説『ヤワル・フィエスタ』においてアルゲダスが先住民やメスティーソの興奮をそのまま伝えていると評価している⁵¹。19世紀初頭のリマでの闘牛がイギリス人旅行者の目にスペインのものよりも残酷な印象を与えたという記述⁵²からすれば、これは現代の闘牛がより安全で平和な儀礼になったためでもあると考えられるので、アルゲダスの小説が舞台としている1930年代においては、少なくとも先住民はより危険にさらされ、それが緊張と興奮を呼んでいたと考えてもかまわないだろう。

とはいえアルゲダスの記述には、一つ現実とはどうしても対応しないものがある。それが最初に指摘した「ヤワル・フィエスタ」という言葉の使用法である。アルゲダスがこの小説で扱っているのは、今まで確認してきたように明らかに通常の闘牛であり、一般にヤワル・フィエスタと呼ばれるコンドルラチではない。作中でもほとんどの場面で闘牛はcorridaまたはturupukllayと呼ばれており、アルゲダス自身これをヤワル・フィエスタと呼ぶのが適切ではないことを意識していたのが窺われる。それではなぜアルゲダスは、コンドルラチが行われないこの小説に『ヤワル・フィエスタ』というタイトルを付けたのだろうか？

次節では小説『ヤワル・フィエスタ』のコンテキストにおける雄牛などの象徴性に注目しながら、アルゲダスがこの言葉に込めた意味を明らかにしてゆく。

牛のダイナマイトによる爆殺は別々に行われている。当然ながらコンドルを縛りつけたまま雄牛を爆殺した場合、友枝やアルゲダスが記しているように後でコンドルを（生きた状態で）山に帰すことは不可能である。

⁵¹ 同上書 206頁。

⁵² 同上書 184-185頁。

3 小説『ヤワル・フィエスタ』における「ヤワル・フィエスタ」(2) ——現実との差異に注目して——

既に述べたように民俗学者としても評価されるアルゲダスだけあって、小説『ヤワル・フィエスタ』における闘牛の記述は大枠において現実のものとは一致する。文化人類学者である友枝がアンデス地域における闘牛について論じる際に、アルゲダスの民俗学的な著作だけでなく、小説『ヤワル・フィエスタ』にも何度も言及するのはその信頼度の高さ故だと考えていい。しかし一方でこの作品があくまで小説として書かれたものであり、小説自体のテーマ・展開に合うよう細部まで巧みに書き込まれていること、まさにそれ故に文学作品として高く評価されていることを忘れてはならない。小説『ヤワル・フィエスタ』は、そもそも伝統的な闘牛の典型を再現することを目指した作品ではなく、ある特殊な状況下で行われる闘牛を描いたものであり、作中では登場する存在から一見矛盾に思えるほど正反対の価値や意味が異なる社会集団によって引き出されている。一対一対応の単純な象徴解釈は、この作品では意図的に排除されていると言っていいのだ。

先住民に対してクリオーリョやメスティーツの支配者層が抱くイメージからして、矛盾したものである。第1章・第2章ではプキオ周辺の先住民が土地を不当な裁判や暴力によって支配者層に奪われ、不毛な土地に追い込まれる姿が描かれる。代表的な大農場主であるドン・フリアンは、自分の意に添わない行動をした先住民の牧童を意識を失うまで殴りつける。このように差別的に先住民を従属させておきながら、プキオの支配者層はこの土地の先住民の「力」を余所者である郡知事に自慢する。

「うちのインディオたちは肝が据わっているんです。よその村のおとなしいインディオ連中みたいなもんだと思わんでください。以前、別の時代には、このインディオたちを押さえつけるためにうちの祖父さんたちは本気で闘わなけりゃならなかったんです。しかも一度ならず肝を冷やさされたもんだ！ 今は私たちはよくもなく悪くもない付き合いをしています。あのチョロたちは大したもんですよ！」(40)⁵³

⁵³ チョロはメスティーツを差すこともあるが、ここでは白人の生活様式に馴染んだ先住民を指している。

対等の人権を先住民に認めず暴力を振るう一方で、先住民の「強さ」を我がことのように自慢するプキオの支配者層に対して、海岸部からやって来た郡知事たちは、先住民が無意味に危険に身を晒すことをやめさせるという「人道的」「文明的」な目的で伝統的闘牛の禁止を強制しようとする。しかし一方で彼らは、伝統的闘牛に固執する先住民を「残酷」で「野蛮」な存在だと考えており、スペイン式の闘牛を自分たちの「進歩」の証と見なしている。作中はっきりと先住民に暴力を振るう姿が描かれる唯一の存在であるドン・フリアンは、一方で伝統的闘牛に対する先住民のこだわりを最も理解し、その実現のために荒牛ミシトゥをカヤウの村人に提供する。これに対してリマに移住して社会主義思想などに目覚めた先住民グループは、観客席にとどまる支配者層が先住民を危険にさらして楽しむ野蛮な娯楽として伝統的闘牛を批判し、スペイン式闘牛の導入に尽力する。しかしカヤウ出身のメンバーの一人はミシトゥの追い込みで村人たちと夢中になり、地元の先住民たちはスペイン式闘牛には反感を示すだけである。

矛盾した行動を取るのは、先住民を取り巻く人々だけでなく、先住民自身も同様である。第2章では先住民が飼っている牛に示す愛情が、都市部に輸出する畜産物としか見なしていない支配者層の冷酷さと対照的に描かれ、先に述べたようにミシトゥ捕獲に関連して歌われる歌では、牛と人間が密接な関係を持つものとされている。ドン・フリアンの命でかつて行われたミシトゥ捕獲に失敗した牧童は、怒ったドン・フリアンに乗馬を射殺され泣き崩れる。だがそれだけの愛情を動物に示しながら、闘牛においてダイナマイトで雄牛を爆殺するという残酷な手段を用いるのも先住民である。

そもそも闘牛自体が、こうした矛盾の最たるものである。先住民は特に獯猛な雄牛を山の神格アプと結びつけ、湖から現れる神話的存在として恐れ、闘牛で対峙する。だがそもそも牛はスペイン人によってもたらされた動物で、アンデスの伝統的な生き物ではない。闘牛も同様であり、先住民はスペイン人による征服があって初めて16世紀に彼らの世界に導入されたものを、「伝統文化」の中に取り込み、守ろうとしていることになる。リマで行われている「スペイン式闘牛」と「アンデス式闘牛」の対立は、実際には外来のスペイン文化と本来土着であった伝統文化の対立ではない。両者はどちらも同じスペイン起源なのだ。

一方「アンデス式闘牛」の主たる参加者が先住民であるとしても、これはクリオーリョやメスティーツと先住民の対立を表しているものでもない。「アンデ

ス式闘牛」を強く支持するグループに地元のクリオーリョやメスティーツが含まれる一方、リマに移住した先住民はスペイン式闘牛を支持している。それはペルー海岸部とアンデス地域の対立と考えるのが最も妥当だが、これすらもはっきりと割り切れるものではない。海岸部からアンデス地域に移住してきた郡知事が全く現地式の闘牛に理解を示さないのに、アンデス地域からリマに移住した先住民はリマの価値観に影響を受けているというところに、両者が対等な対立関係にあるのではなく、リマ（海岸部）優位>アンデス劣位という文化的ヒエラルキーの下にあることが明らかにされている一方で、クリオーリョやメスティーツが優位であり、先住民は劣った存在であるというプキオでは揺らぐことのない価値観に対して、先住民とその文化を再評価するインディヘニスマが成立するのは海岸部から広まったマルクス主義の影響あってのことであり、リマに移住した先住民たちはこの流れに棹さして先住民の権利拡大を目指して活動している。アンデス先住民（文化）の地位向上は、海岸部を経由することで初めて思想的なバックアップを得られるのだ。

同じ一つの物事であっても、どのような所属集団の立場から、あるいはどのようなイデオロギーに基づいて判断するかによって、その意味は異なってくる。先住民の自発的な活動が支配者層の予想を上回る成果をあげる例として第7章で描かれるプキオから海岸部への直通道路開発は、結果的にリマなどへの先住民人口の流出を招くばかりで、プキオに留まる先住民にいかなる利益をもたらしているのかははっきりしない。同じく先住民の力が発揮されるミシトゥ捕獲に始まる闘牛は、先住民側に複数の死傷者を出して終わる。確かなのはただ一つ、先住民の備えているエネルギーは大きな事業を実現する力を持っているが、道路開発のような一見建設的な事業に注がれる場合でも、闘牛のような伝統文化の維持に注がれる場合でも、結果的に少なくともアンデス地域に住む先住民の生活環境や地位の改善には結びつかないまま蕩尽されてゆくということである⁵⁴。

動物表象に話を戻すならば、両義性は荒牛ミシトゥにも見て取ることができる。既に述べたように、アンデス地域では伝統的に住民は自分たちが育て提供する牛と自分を同一視するが、小説『ヤワル・フィエスタ』においても同じ考えが表現されている。この場合、クライマックスの闘牛において、ミシトゥは

⁵⁴ もちろんリマへの直通道路が促進した都市部への先住民の移住は、先住民の権利拡大に関心を持つインディヘニスタ（インディヘニスマ主義者）の活動につながっており、この事自体は作中ネガティヴには描かれていない。しかし小説『ヤワル・フィエスタ』のクライマックスの闘牛においては、彼らの意図は当の先住民たちに理解されないままに終わっている。

先住民を象徴するものと解釈されるべきであろう。しかしクライマックス近く、並行して異なる解釈の可能性が提示される。リマから招かれたプロの闘牛士による闘牛を妨害する可能性があると思なされ投獄されたドン・フリアンに対して、同じく投獄されていたドン・パンチョは以下のように語りかける。

「あなたは、ドン・フリアン、ルカナスでは父牛みたいなものです。隅から隅まで、他の連中を押しよけ、力づくで従えながら歩き回っている。」(144)

ここでは大農場主であるドン・フリアンが雄牛に擬えられている。この解釈に従えば、雄牛ミシトゥはドン・フリアンに代表されるスペイン系支配層の象徴となり、それが先住民と対峙することになる。これはコンドルラチにおける雄牛をスペイン人征服者、コンドルを先住民の象徴と見なす、友枝がインディヘニスモの影響を受けたと考える解釈に接近する。この解釈は、雄牛の名ミシトゥ (Misitu) と先住民がクリオーリョを指して用いるミスティ (misti) という単語の類似によっても確認される。

さて、ここでも注意しなければならないのは、現実に行われるコンドルラチの解釈に引きずられ過ぎることなく、小説『ヤワル・フィエスタ』のコンテクストにおいてコンドルラチを解釈する必要である。既に第2節で述べたように、この小説においては、コンドルラチにおけるコンドルは雄牛と対峙するものとして先住民と同一視されているのではない。雄牛を傷つけより猛り狂わせるために括り付けられるものと考えられている。またコンドルと同じく雄牛の背中に括り付けられるものは、現実の場合のような布製のエンハルマや鏡、食器といった繁殖儀礼と結びつくものではない。エンハルマはエンハルマでも、繁殖儀礼の要素としての意味を持たず、「町の」女性たちが金貨銀貨を縫い込むことによって先住民闘牛士の射幸心と熱意をかき立てるものとされている⁵⁵。つまりこの小説においては、コンドルラチにおけるコンドルや通常の闘牛におけるエンハルマのような雄牛の背中に付けられるものはみな、雄牛あるいは先住民を刺激することによって、闘牛をより危険なものにする働きを担わされているのである。

⁵⁵ パルマによれば19世紀初頭のリマの闘牛では、雄牛は金貨銀貨に覆われたエンハルマを付けて登場したという。ただしパルマはこれをクリオーリョやスペイン出身者（ペニスラーレス）が華やかさを競ったためとしており、アルゲダスのように参加者の射幸心を煽るためとはしていない。Palma, *op. cit.*, p. 52.

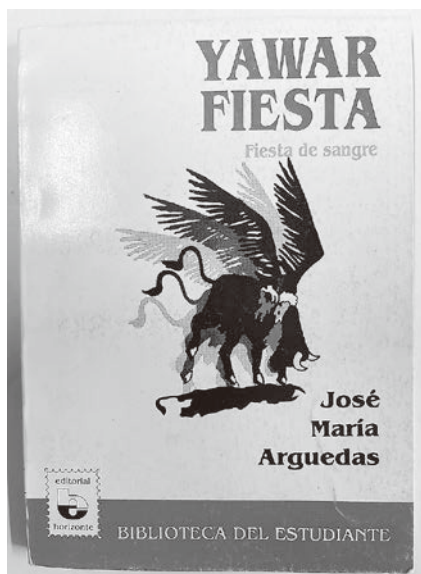
このように解釈した時、初めてこの小説が『ヤワル・フィエスタ』と題されている意味が分かってくる。作品においてこの言葉が用いられているのはまずタイトルであり、そしてクライマックスの闘牛を描く最終11章の章題である。ここではこの小説全体の核となりクライマックスを成す闘牛が「ヤワル・フィエスタ」であることが示されているが、繰り返して述べているように、クライマックスの闘牛は本来「ヤワル・フィエスタ」と呼ばれるべきコンドルラチではない。作中もう1カ所、タイトル・章題ではない文中では唯一この言葉が用いられるのが第3章である。この章はまず、第2節はじめて紹介した注がつく形で、角笛でturupukllayが奏でられる場面から始まる。第2章までは特に年を限定することなくプキオ周辺の先住民が蒙ってきた苦難を描いていたが、ここでは会話の内容から、このturupukllayがミシトゥを相手にするクライマックスの闘牛を予告するものであることが明らかになっている。

Yawarという単語が（厳密には複合語として）初めて登場するのは、この場面でも回想される、雄牛の角で腹を刺された男が叫ぶ“¡Atatau yawarcha!” (28) という言葉においてである。ataatau, atatauyaは不快感を表す感嘆詞、yawarchaはyawarに縮小辞が付いた形なので、出血を軽く見て「けっ、ちょっとばかり血が出てやがる」と威勢のいいところを見せた言葉である⁵⁶。ここで注意すべきは、言及されているのが雄牛ではなく先住民の血だということだ。そして少し後で、「角笛があらゆる丘でヤワル・フィエスタ (el yawar fiesta) を告げて歌っていた。」(28) という文が来る。これが文中でヤワル・フィエスタという語が用いられる唯一の例である。この後過去の経験や一般的なものについて先住民が言及する闘牛には、一貫してturupukllayが用いられている。

既に何度も繰り返してきたように、第3章で予告されている闘牛はクライマックスで行われるものであり、コンドルラチではない。「ヤワル・フィエスタ」がコンドルラチを指すということは、ペルーにおいては多くの人が知っている情報であり、Editorial Horizonteの「学生向け文庫 Biblioteca del Estudiante」版『ヤワル・フィエスタ』の表紙にも、作中ほとんど出てこないコンドルラチの絵が描かれているくらいである(図2)。民俗学者でもあるアルゲダスがそのことを知らないわけではなく、この「誤用」は意図的なものだと考えられる。ではそれによってアルゲダスは何を表現しようとしたのだろうか？ 第一には、本来コンドルラチにおいてコンドルが引っ掻いて雄牛に流させる血を指す「ヤワル」

⁵⁶ Jimmy, op. cit.

を、闘牛において先住民が流す血と読み替えることによって、この作品に描かれる闘牛の暴力性、特に先住民にもたらす被害を強調する意図が考えられる。ただそれだけでは、アンデス式闘牛の残酷さを強調するためにあえてこの言葉を本来用いられないものにまで拡大して利用しただけで、特別な深い意味はないことになる。



(図2)

だがこのミシトウを相手にした闘牛には、コンドルラチとは異なりコンドルが欠如している一方、通常の闘牛にはないもう一つの要素が存在している。それがリマから招かれたプロの（スペイン式）闘牛士である。アンデス式闘牛反対派は、先住民の反発を避けるべく、プロの闘牛士を招いていることを知らせずに闘牛を準備し、先住民を場内に入れないようにしながら、予告なしにスペイン式闘牛を行おうとする。ただしスペインあるいはリマで現在行われているものとは異なり、馬上から槍で突くピカドールも短鉞を刺すバンデリジェーロも登場せず、闘牛士（マタドール。この作品では一貫して torero と呼ばれている）が一人ミシトウを相手にすることになっている。この展開はスペイン式闘牛についてのアルゲダスの無知によるものなのか、意図的なものなのかはわか

らない。スペインなどで闘牛に用いられるような、ミシトゥのような荒牛の場合、ピカドールやバンデリジェーロが介入して弱らせることなしにマタドールだけで倒すことは不可能である。闘牛の初めにマタドールが雄牛をあしらうのはあくまでも相手の癖や力を見計らうためだけなのだ。この小説においては、ピカドールやバンデリジェーロが控えている描写はない。ただマタドールのイバリートがミシトゥをケーブ（capa）であしらうのに失敗して、退避柵に隠れるところまでは、スペイン式闘牛でも最初に牛の品定めに行われるラ・カバ（ケーブ）の場と考えてもおかしくはない。この作品ではその段階で退避を臆病と見なした先住民闘牛士（capeador）たちが場内に乱入してしまうので、アルゲダスは本来の手順を承知の上で、記述を簡略化するためにピカドールらへの言及をしなかったと取ることもできる。

いずれにせよ重要なのは、このミシトゥ相手の闘牛において、プロの闘牛士イバリートがコンドルラチにおけるコンドルの役割を果たしていることだ。彼は雄牛と先住民それぞれをより猛り狂わせるために介入し、自身はそのまま退場するが、先住民1名の死とダイナマイトによるミシトゥの爆殺という過激な暴力を引き起こす。先に述べたように、作中先住民が能力を発揮した例として大きく取り上げられているもう1つ、海岸部への直通道路開発は、山を切り開くのにダイナマイトを利用し、その事故による先住民の死傷を引き起こしながら遂行されている。この2つの事例の対比を完全にするためには、小説『ヤワル・フィエスタ』において山の神格を象徴する雄牛を殺すためにダイナマイトが用いられるのは、現実にあったことか否かは別として、必然であったと言える。そしてスペインとは通常全く結びつけられることのないコンドルがスペイン式の闘牛士に置き換えられることで首都リマを中心とする海岸部中央権力の介入を象徴し、先住民とも結びつけられ得るがドン・フリアンら大農場主も象徴しうるミシトゥと、大きな可能性を秘めながらもその能力を内部で無益に爆発させる先住民が殺し合う。海岸部の中央政府、アンデスの支配者層、先住民の三つ巴の争いを象徴的に描き出すためには、雄牛対先住民という二者の対決図式から成る通常の闘牛ではなく、それにコンドルが加わり三者構造となるコンドルラチ=ヤワル・フィエスタを前提としなければならなかったのである。

4 結語

以上見てきたように、アルゲダスは小説『ヤワル・フィエスタ』において、民俗学的知識を活かしてアンデス式闘牛とそのシンボリズムを再現するだけでなく、作品のテーマに合わせて雄牛が象徴するものを変えたり、儀礼においてコンドルが占める位置をスペイン式闘牛士に入れ替えることによって、自身のペルー社会・先住民問題観を表現する独自の表象を生み出している。

小説の最後に町長が郡知事に言う「これが私たちの闘牛 (corridos) です。正真正銘の「血の日 El yawar punchay」です！」(156)⁵⁷という言葉は、アルゲダスの問題意識の明確さを表している。ここでは再び、闘牛自体は corridos と呼ばれ、yawar fiesta という言葉は用いられていない。El yawar punchay はコンドルラチを意味する yawar fiesta の同義語ではなく、暴力的な社会構造が流血を伴う儀礼を通じて明らかにされるその一日全体を指している。それこそがアルゲダスにとって「私たちの」と呼ばれるべきアンデス社会なのだ。

参考文献

- Arguedas, José María. *Yawar Fiesta: Fiesta de sangre*. Lima: Editorial Horizonte, 1993. (『ヤワル・フィエスタ (血の祭り)』杉山晃訳、現代企画室、1998.)
- 有本紀明『闘牛——スペイン 生の芸術』講談社、1996.
- バラテ、エリック & アルドゥアン＝フュジエ、エリザベト『闘牛への招待』管啓次郎訳、白水社、1998.
- ファーヴル、アンリ『インディヘニスム——ラテンアメリカ先住民擁護運動の歴史』染田秀藤訳、白水社、2002.
- インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ『インカ皇統記』(全4巻) 牛島信明訳、岩波文庫、2006.
- Jimmy, “Aprendiendo nuevos conocimientos: Vocabulario en quechua de YAWAR FIESTA”, 2011.6.11., <https://docentejimmy.blogspot.com/2011/06/vocabulario-en-quechua-de-yawar-fiesta.html> (2021年9月16日取得)
- ラテンアメリカ文化事典編集委員会 (編)『ラテンアメリカ文化事典』丸善出版、2021.

⁵⁷ “punchay” の意味については Jimmy, op. cit. 参照。杉山はカタカナで「ヤワル・ブンチャイ」としている。

マーヴィン、ギャリー『闘牛——スペイン文化の華』村上孝之訳、平凡社、1990。
Palma, Ricardo, *Tradiciones peruanas completas*. Edición y prólogo de Edith Palma,
Madrid: Aguilar Ediciones, 1953 (2ª edición).
佐伯泰英『闘牛はなぜ殺されるか』新潮社、1998。
シエサ・デ・レオン『インカ帝国地誌』増田義郎訳、岩波文庫、2007。
友枝啓泰『雄牛とコンドル——アンデス社会の儀礼と民話』岩波書店、1986。